

<要旨>

東日本大震災からの着実な復興のために、被災地の復興感を随時把握することが重要な課題となっている。このために被災地の一つである岩手県は性格の互いに異なる複数の調査を実施し、県民の復興感の把握に努めている。

ところで行政統計のあり方として未加工の単純集計結果をそのままの形で表示することが多いが、そうした調査結果報告に含まれる情報量が膨大であるために、データから結論を読み取る労力が大きくなる。そのため、適切な方法による加工・視覚化（Visualization）が求められる。

本稿では、被災地の復興感に関する調査の一つである「いわて復興ウォッチャー調査」データ視覚化の一つの方法（アナログ時計表示）を提示するものである。

1 研究の概要（背景・目的等）

本稿では、被災地の復興感に関する調査の一つである「いわて復興ウォッチャー調査」データ視覚化の一つの方法を提示（アナログ時計表示）するものである。

データの視覚化（Data visualization）または情報デザイン（Information design）は情報を効果的に表示する技術のことであり、1970 年代にグラフィック・デザインの一分野として生成したとされる（Wikipedia）。この分野における初期の成果は Tukey（1977）や Tufte

（1983）に見ることが出来る。

その後、2000 年代にインターネット上に大量のデジタルデータが蓄積されるに伴って、あるいはデータマイニングなど統計情報の活用分野が広がるに伴って、より洗練された技術が活用されるようになった（例えば Friedman（2008））。

データ視覚化の著名な実例の一つとして「終末時計（Doomsday Clock）」が挙げられる（図 1）。

復興感とは、被災地の観察者が様々な事象を観察した結

IT IS 5 MINUTES TO MIDNIGHT

Press Release

Timeline

Overview



図 1

果、それぞれ復興の度合いを判断したものを集約したデータであると言える。震災直後においては、多数が復興の度合いを最低と判断するが、時間の経過に伴い、一部の観察者が復興の度合いを高め判断する。最終的にはすべての観察者が復興の度合いを最高度判断することになるだろう。時点毎に集約した復興感を基準化することにより、0 以上 1 以下の数値が一つ得られる。この数値は 0 から 1 に向けて時間経過と共に変移していく。

その変移の割合は一定ではなく、後戻りすることも有り得るが、趨勢として単調増加するだろうと予想できる。

2 研究の内容（方法・経過等）

「いわて復興ウォッチャー調査データ」の視覚化は以下のような手順で行う。1. リッカート尺度により尺度化した復興度の算術平均値をとる。2. 3 ヶ月間の結果についても同様に集計し、差を把握する。3. 前回からの差を

アナログ時計表示し、時刻換算された数値を計算する。

3 これまで得られた研究の成果

図2 は調査報告書に記載された図である。単純集計

結果をそのまま表示しており、情報量が豊富であるが全体像がやや掴みにくい。図3 は上のものをアナログ時計表示したものである。情報量を思い切って削減することにより、現在の回復度を感覚的に表示している。

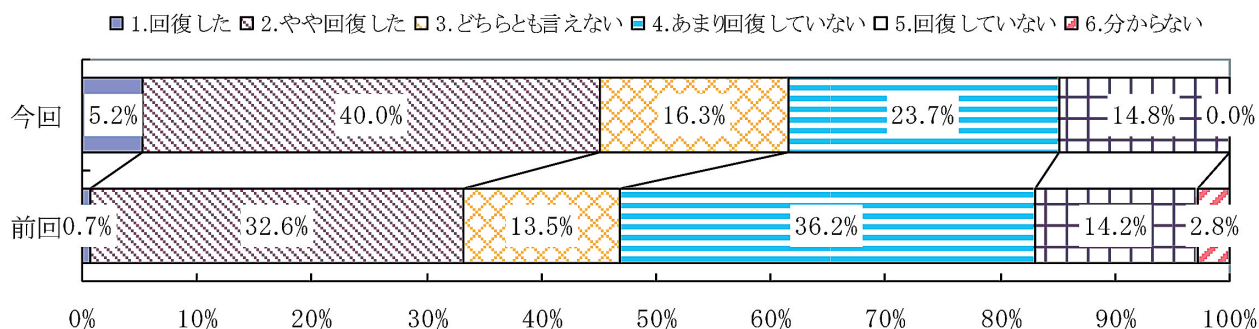
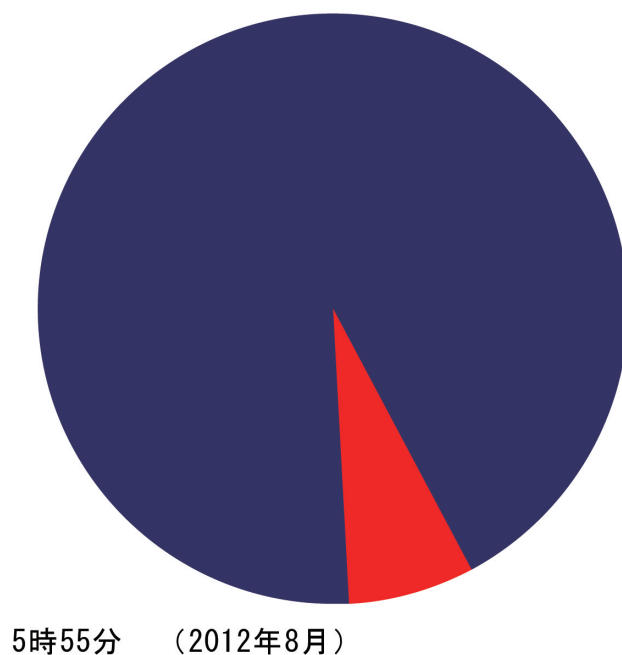


図2

生活の回復（被災地全域）



4 謝辞

調査データについて岩手県復興局より多大な便宜を受けた。厚く御礼申し上げます。